

---

# 底なし沼

花村かおり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

底なし沼

### 【Zコード】

Z3630BA

### 【作者名】

花村かおり

### 【あらすじ】

私が夢の中で出会う女性。彼女は自分が夫を底なし沼に沈めてしまったのだと、私に涙ながらに語りかける。

## 底なし沼①

嫌なことがあると良く見る夢がある。

底なし沼の辺に立つて、ぼんやり沼面に映つていて自分をジッと觀ている。

暫くすると髪を結つて、木綿の着物をきた女性が後ろからあらわれ自分に重なり、一つとなつてしまつ。

その女性はうつりと唸ると赤い顔をして涙をホロホロ流してしまつ。ある日、私はその女性に尋ねてみた。

その女性と一つに重なつていてにじりやつて尋ねるかと疑問に思うが、それは夢であるから自在にできるのだ。

「あなたはどうして泣いておられるのです？」

「夫を亡くしてしまつたからです」と声も絶え絶えで女は答えた。

「それは、それは、ご愁傷様です」と私は言つた。

それからも、女は泣きじやぐるばかりなので、私は

「あの、尋ねても宜しいでしょうか？」と尋ねてみた。

「ええ、夫はこの沼に沈んでしまい、一度と出られなくなりました。村の伝承によると、この沼は底なし沼で一度足を入れてしまつと、ずんずんと引き込まれてしまつんです」と女は俯き、声を枯らしながら言つた。

「なぜ、旦那様はこのよつな危なことひに足を入れてしまつたのでしょうか？」

「ええ、実はと詰つて、私が突き落としてしまつたんです。そして村の伝承どおりに、あれよあれよと夫は沼の奥深くに沈んでいきました。そして、私も後を追おうとして足を踏み入れたのです」と言うと女はさりにさめざめと泣くのであつた。

「ええ」と私は驚きながらも尋ねる。

「しかし、どうしてでしょう？私は一向に沈まない。膝ぐらいの深さまでしか行けないのです。それで未練がましく、ここで夫の供養

をしているわけで」「やこます」と女は言った

「そうなのですか」と私は返すこともなく頷くことしかできない。

「いつしか、私も寿命がきて、この世を去りました。しかし、新しい世に生まれ変わつても、夫のことが忘れられず、こうして夢の中で供養をしているわけです」と女は氣を取り直したように、氣丈な口調で話した。

「ど、どうと?」と私は尋ねた。

「そう、私は貴方に生まれ変わつてもなお、夢の中で夫を追い続けているわけです」と女は言った。どうやら私はこの女の生まれ変わりらしい。

「しかし、旦那様もきっと生まれ変わつておられるでしょう? もうそろそろ良いのではないのでしょうか?」と私は女を慰めようと精一杯に言った。

「いえ、未練があり、まだ魂がさまよっている事でしょう」とめそめそ泣き止まず、私は声をかけられず、明け方早くに旦那が覚めるのである。

## 底なし沼2

「その夢のことを恋人のヒロに話してみた。

「不思議なことに毎回同じで進展がないのよ。私も夢見が悪いのが嫌だから、何とかしたいのだけれど」

「すると君は夫殺しの生まれ変わりか。俺もそのうち沼に突き落とされて殺されてしまうのかなあ」と冗談ぽく笑つていつた。

「もう、ひとつ、なんだから」と私は不満そうに言つた。

「私の育つた町に古いお寺があるのだけれど、そこに底なし沼であるという伝承の沼があるの。見た目はなんら変わらない、おたまじやくしが泳いでいる沼なのに、昔々、水牛が足を滑らせて、池に落ちてしまい、人間が助ける間もなくあれよ、あれよと沼深く沈んでいつたつて石碑に書いてあつたわ」と私はもしかしたらあの池のことなのかな、と思つて言つた。

ヒロは「その石碑を詠んだことが強烈で夢に出てきたんじゃないかな？」と言つた。

確かに子供のころに読んだあの石碑の物語が強烈であつたことは確かである。なるべく沼には近づかないよう遠くで沼をうかがうように覗いていたことを思い出した。

「そうなのかなあ」と私は答えた後、「でも今度同じ夢を見たら、その人に尋ねてみようと思うの。何故、夫を沼に突き落としたのかつて」と言つた。

「夢がコントロールできたら楽しいね」とヒロが全く「ひとつ」として答えていた。

しかし、そう決心してみても、確かにヒロが言つて、自分が見る夢を思い通りにコントロールすることは出来ず、しばしばその夢を見ることがなかつた。

数ヶ月経つたころ、やつと、その夢にたどり着いた。いつものように女は泣きじやぐるばかりである。

「何故、旦那様を突き落としてしまったのですか？」とやつとのことで尋ねることができた。

すると女は言葉少なく話を始めた。

「彼岸を少し過ぎた頃のことでした。私の住む武州の西のはずれにある山間の小さな村では、前日に雨が降つておりましたが、朝にはもう止んでいました。寒さは緩み、大地からはしつとりした暖かさが伝わって、我が家のある菩提寺の梅の花が控えめに美しく咲き乱れておりました。

私は自宅で紡いだ生糸を、商取引をしている河野家に送り届ける途中、ちょうどその寺の前を通りかかりました。

そのとき向かい側から一人の侍が胸をはつて歩いてきました。絹のパリッとした羽織袴姿で、腰に二刀を差しておりました。この辺りでは見かけたことの無い立派な武家様でした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3630ba/>

---

底なし沼

2012年1月10日20時55分発行